

5. 調査方法に関する課題

当調査を実施した際に、調査の問題点、限界点が明らかとなった。表 5-1 にその課題と対応策についてまとめる。

表 5-1 調査における課題と対応策

	項目	課題	対応策
1	調査枠の設置方法	干満の差の大きな海岸では、調査枠から汀線までの間にゴミが漂着し、共通調査結果に反映できなかった。	現在の調査枠（固定枠）以外に必要に応じて可動枠を設置し、固定枠外のゴミの漂着量を把握する。
		人力で移動できない流木・漁網がある位置に調査枠が設置できなかった。	調査開始前に、調査対象範囲のゴミの完全撤去（リセット）を実施し、任意の場所に調査枠を設置できるようにする。
2	ゴミの漂着状況の把握	漂着ゴミの時間変動間隔が、共通調査の間隔に比較して短く、風・河川流量と漂着状況の関係が把握し辛かった。	定点観測の観測地点数を充実させ、より短周期の漂着量変動の把握に努める。
		ゴミの蓄積量の季節変化について、定性的なパターン分けはできたが、定量化（数量化）が困難であった。	定点観測写真（週 1 回程度）を用いた漂着ゴミの定量化などより、飽和蓄積量および時定数を推定する。
3	発生源の把握	発生国、発生場所の推定（ライター、ペットボトルにより）はできたが、発生要因の推定ができなかった。	ヒアリング等による情報の充実による推定。 特定地域の商品にラベルを貼るなど、何らかのトレーサビリティ調査の検討。